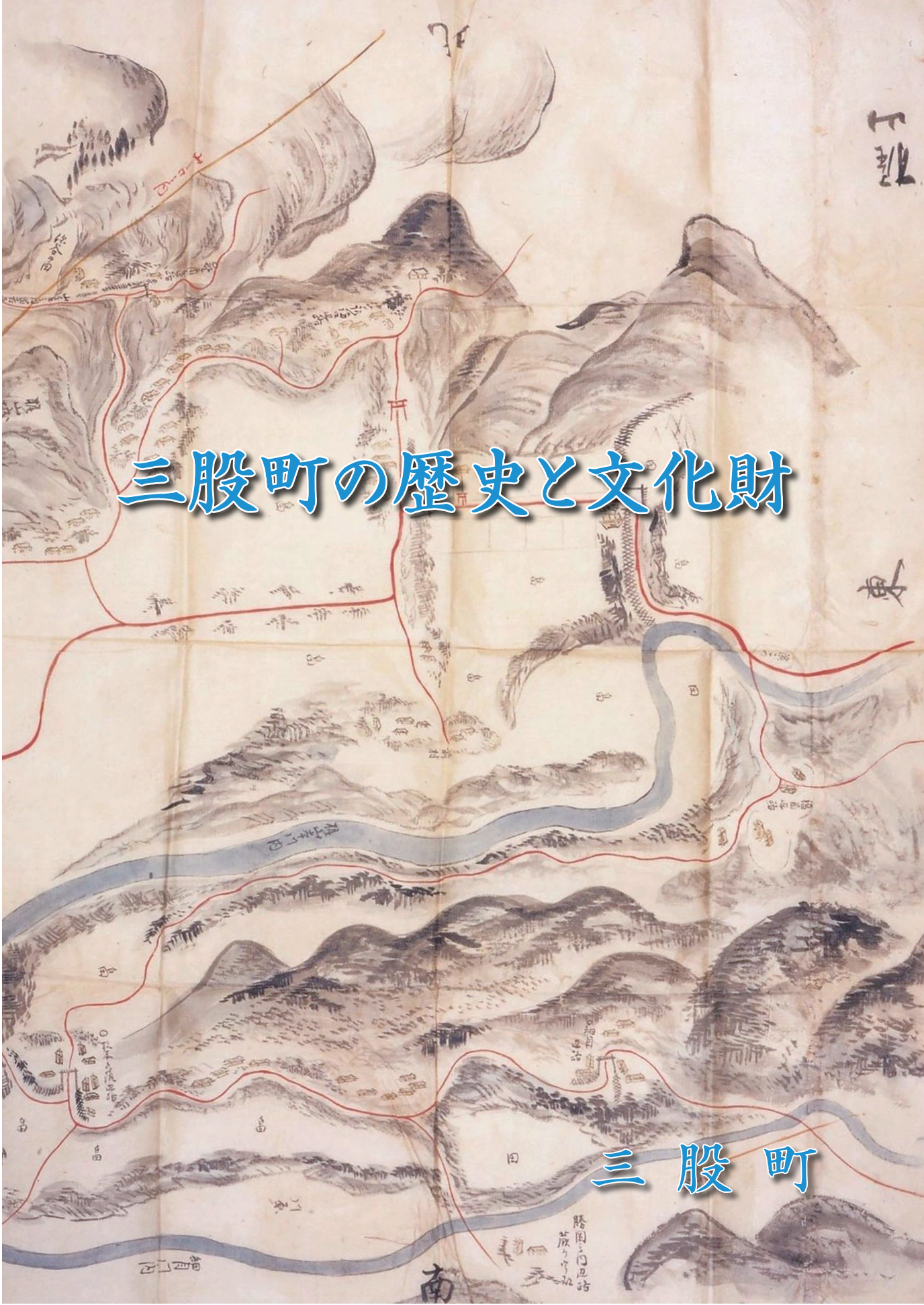


三股町の歴史と文化財

三　股　町

目　次

序　章　三股町の自然環境

1　三股町の位置 …… 2
2　三股町の地形環境 …… 3

第１章　原始・古代の三股

1　縄文時代の三股 …… 6
2　弥生時代の三股 …… 7
3　古墳時代の三股 …… 8
4　奈良・平安時代の三股 …… 9

第２章　中世の三股

1　鎌倉時代の三股 …… 12
2　南北朝時代の三股 …… 14
3　室町時代の三股 …… 17
4　戦国時代の三股 …… 20

第３章　近世の三股

1　豊臣政権と都城・三股地域 …… 22
2　鹿児島藩政と三股地域 …… 26
3　交通網の整備と番所 …… 28
4　飫肥藩との境争論 …… 32
5　鹿児島藩の農政 …… 36
6　江戸時代の三股の産業 …… 38
7　三股地域の教育 …… 41
8　田の神信仰 …… 42
9　三股の寺院と神社 …… 44
10　かくれ念仏 …… 48
11　幕末の情勢 …… 50

第４章　近現代の三股

1　旧体制の解体 …… 54
2　都城県の成立 …… 58
3　西南戦争と三股 …… 59
4　宮崎県再置と三股村 …… 62
5　三股の産業 …… 64
6　三股の交通 …… 68
7　水利事業の展開 …… 70
8　近代の教育 …… 72
9　都城東飛行場と三股 …… 76
10　戦後の教育改革 …… 78
11　平成の大合併と三股町 …… 80

第５章　三股町の文化財

1　三股町指定文化財 …… 82
2　中世城館 …… 88
3　史跡 …… 94
4　建築・土木構造物 …… 96
5　田の神 …… 98
6　棟札・文書 …… 100
7　民俗芸能 …… 102

■ 三股町文化財一覧 …… 103
■ 三股地域の村・方限・門一覧 …… 104
■ 「庄内地理志」にみる三股の産物 …… 105
■ 『日向地誌』にみる三股の産物 …… 105
■ 三股町誕生の軌跡 …… 106
■ 町内小学校の変遷 …… 107
■ 参考文献 …… 108

この本を読むにあたって

三股町では、2014（平成26）年から町史編さん事業に着手し、2019（平成31）年３月に『三股町史』上下巻を刊行しました。学術的要素を取り入れた分、読みごたえがあったという感想をいただいた一方で、上下巻合わせてのページ数が1400ページあることと、内容が専門的ということもあり、「もう少しわかりやすい町史がほしい」という声をいただきましたので、このたび『三股町史』のダイジェスト版を作成した次第です。作成にあたっては、以下の点に注意しました。

■三股の原始から現代まで、幅広い歴史を紹介できるよう心がけましたが、紙数の都合で現代編は大きくカットしました。詳しくは『三股町史』の下巻をご参照ください。

■写真・図版を多く使用し、全編オールカラーとし、読みやすいように全体で100ページ程度におさめました。

■人名の敬称は省略しました。歴史上の人物や地名の読み方は辞書に合わせ、より多く使われているふりがなを適宜付けました。

■年は、教科書に合わせて西暦を使用し、元号はカッコの中に入れて表記しましたが、改元時期の合わない部分もあります。特に南北朝時代は南朝・北朝の元号が混在しています。これは、史料に記載してある年号を使用したためですが、基本的には『三股町史』に合わせました。

■『三股町史』のダイジェスト版として、広く町民の皆様を読者の対象とすることを心がけました。詳しく調べたい方は『三股町史』をご一読ください。

序章　三股町の自然環境

椎八重公園

長田地区の棚田

イチョウ並木とイチョウの葉で
デザインされた三股町章

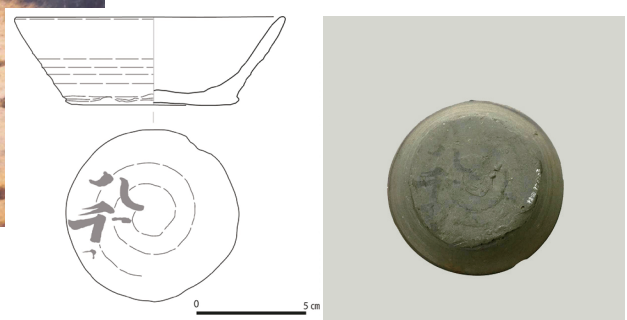
上米公園

本章では、豊かな自然に恵まれた私たちのふるさと三股について、『三股町史 上巻』「第１編 自然･原始･古代」「第１章 三股町の位置と自然地理的環境」から抜粋･紹介していきます。

第１章　原始・古代の三股

2004（平成16）年に発掘調査された
梶山の中原遺跡（古墳時代の集落跡）

1999（平成11）年に発掘調査された
諏訪廻第１遺跡の溝状遺構



櫟田地区で見つかったとされる墨書（ぼくしょ）土器
（「八千」の文字あり、９世紀前半の須恵器か）

本章では、三股に人々が住み始めた縄文時代から、町の名前の起源である「水俣」「三俣」に関わる平安時代までについて、『三股町史 上巻』「第１編 自然・原始・古代」の「第２章 先史時代の人々の暮らし」と「第３章 奈良・平安時代」から抜粋・紹介していきます。

島津荘と三俣院の行方

島津忠久が日向国の守護・地頭職を罷免されたあとは、鎌倉幕府の執権である北条氏が日向国の守護・地頭職を独占していったようである。確認できるのは、1250（建長２）年の北条重時から長時→義宗→久時→守時→英時で、鎌倉幕府滅亡まで北条氏が続いた。ただ、彼らは幕府の執権や鎮西探題であったので、日向国に赴いたわけではなく、地元の有力者を取り込みながら島津荘を経営していった。

『町史　上巻』(p. 172-188) では、平安時代後期から鎌倉時代の島津荘の有力者として、富山、日置、肝付、萩原、梅北、和田、高木の各氏を紹介している。肝付・萩原・梅北の各氏は、元々伴氏で、島津荘を開発した平季基の娘婿となったのが伴兼貞である。兼貞の長男兼俊が肝付氏、２男兼任が萩原氏を名乗り、萩原氏は三俣院の弁財使職を相伝したという。萩原氏は、都城・三股地域を流れる萩原川の名を取ったとされ、三俣院の領主であった時期もあることから、三俣氏ともいった。その後、三俣院の領主職は長男家にあたる肝付家に譲られ、南北朝時代に南朝方として活動する肝付兼重が登場する。兼重は、三俣八郎左衛門と称して、三俣院高城で勢力を拡大していった。

萩原川下流から都城・三股地域を望む

鎌倉幕府の滅亡とその影響

３代将軍実朝の死後、承久の乱を経て、執権の北条氏本家（得宗家）が幕府の実権を掌握した。しかし、次第に北条得宗家の専横的な政治に不満が募り、1333（元弘３）年に後醍醐天皇を中心とした勢力が倒幕を果たした。その後、倒幕に参加した者に恩賞として所領が与えられ、島津荘は足利尊氏に与えられた。ただ、島津荘は北条家の支配が浸透しており、尊氏に反抗するものが続出した（『町史　上巻』p. 184-185 の「島津庄謀叛人交名」）。「謀叛人交名」に名前はないが、先述した肝付兼重も尊氏方と敵対しており、島津荘には不穏な空気が流れていった。

1　豊臣政権と都城・三股地域

伊集院氏の都城入部

島津氏は九州制覇を目前にして豊臣政権に攻められ、1587（天正15）年５月に降伏した。徹底抗戦の意志を示していた北郷氏は、人質を出すことで都城の領主として認められたが、所領替えによって、1595（文禄４）年８～９月頃に祁答院（鹿児島県薩摩郡さつま市・薩摩川内市の一部）へ移動した。都城には鹿屋（鹿児島県鹿屋市）から伊集院忠棟（※１）が移り、８万石を領有した。

庄内の乱

豊臣秀吉の死去後、1599（慶長４）年３月９日に、島津義久の女婿で義弘の３男忠恒（後の藩主家久）が伏見の島津邸で島津家重臣の伊集院忠棟を殺害するという事件が起きた。殺害理由は、諸説あって明確な答えは出ていない。３月下旬に忠棟惨殺の一報が都城に届くと、息子の伊集院忠真はすぐに居城都城に立てこもり、当主である島津方に対して抗戦姿勢を示し、勝岡・梶山を含む12の城（※２）を修築した。戦闘は、庄内（都城盆地を指す）を舞台にして展開されたため、「庄内の乱」と呼ばれた。大規模な戦闘は、1599年６月22日の恒吉城（鹿児島県曽於市大隅町）で幕を開けた。

庄内の乱が書かれた写本・異本の多い「庄内軍記」
（都城島津邸所蔵）

※１：伊集院忠棟（幸侃）は島津家の筆頭家老であり、石田三成を通じて豊臣政権と交渉する際の窓口となり、指示や意向を島津家に取り次ぎ、秀吉から高く評価されていた。

※２：12の城は庄内12外城と呼ばれ、末吉・野々三谷・志和池・高城・山田・安永・財部・恒吉・梅北・山之口・勝岡・梶山城のことで、都城を守るように12の城が囲む。

⇒庄内の乱については『町史　上巻』p. 384-397 参照。

第４章　近現代の三股

三股町役場と三股町総合文化施設（文化会館・図書館）付近

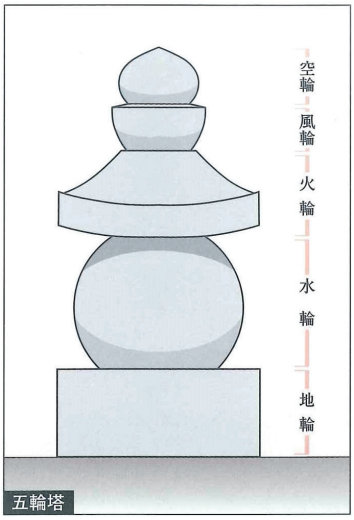
1967（昭和 42）年頃の三股小学校前五差路

町制施行 70 周年　記念式典（2018 年 11 月 3 日）

明治時代を迎え、欧米諸国の政治・文化を取り入れたことで、人々の生活は大きく変わりました。近代化は進みましたが、未曽有の戦争を連続して経験した歴史は忘れてはならないでしょう。戦後復興にまい進した日本は先進国の仲間入りを果たしました。三股発展の歩みも歴史を通して学びましょう。

1 三股町指定文化財

都城島津３代北郷久秀・弟忠通の墓



北郷兄弟の墓は、梶山小学校の北側山手（梶山城跡）の南西麓の大昌寺跡地にある。墓石は五輪塔で、右側が兄久秀（火輪部に日山と刻字）、左側が弟忠通（火輪部に聖安と刻字）の墓である。火輪部の刻字は兄弟それぞれの法名の一部で、久秀が「薦福寺殿日山妙旦大禅定門」、忠通が「聖安道賢大禅定門」といった。大昌寺は、兄弟の菩提を弔うために建立された寺院だが、元々の寺院名は薦福寺といった。これは、久秀の法名に薦福寺とあること、兄弟の墓前に設置してある右側の四角石柱（第２章扉の写真参照）にも薦福寺と刻字してあることがその証左である。「庄内地理志」巻 99 によれば、大昌寺は龍泉寺（都城市都島町）の末寺であり、龍泉寺が掲載されている「庄内地理志」巻６には、龍泉寺は山号（※１）が２度、寺号が３度改められたとある。龍泉寺は、霊照山薦福寺→万年山常徳寺→万年山龍泉寺という変遷をたどり、大昌寺は、霊照山薦福寺→四徳山大昌寺という変遷をたどったことになる。

※１：寺院の正式名称には、山号・院号・寺号が付くものがある。山号は、実際にお寺のある山の名称や仏教用語が付けられ、お寺の正面の門を山門と呼ぶことにも表れている。院号は、一般的に僧侶の住んでいる場所を指す。

⇒梶山合戦については『町史　上巻』p. 215・232、本書 p. 18 参照。
⇒大昌寺については『町史　上巻』p. 587・590、本書 p. 45 参照。